



きらつと教育

3回シリーズで、「児童養護施設における予防教育法の観点からのアウトドア考察」を紹介いたします。

ドン・ボスコの提唱した予防教育法の観点から考察すると、アウトドアは、「グラウンド・コミュニケーション」に相当する。教室では、教壇から生徒に接し、教師は生徒の上に位置しているが、グラウンドでは両者は同位置にあり、親密な交わりが可能となる。

結論から言うと、予防教育法によるアウトドアは、先生と子どもたちとの信頼関係を築くための重要な一方法と言えよう。

ドン・ボスコの言葉から、私なりにサレジオ会的なアウトドアを考えてみたいと思う。

その3：「教育は心の問題です！」

「心」とは神が内在する神秘的な部分であるとドン・ボスコはとらえていた。それは理屈で解明できるような理論ではなく、じっさいに人間が体験していることである。「愛」は必ず通じるものである。

昔から、「三つ子の魂百まで」と言われているが、楽しい、辛い、悲しい、そういう思い出を貯めておく「海馬」の発達が始まるのは3歳から4歳の時から始まることを考えると、納得がいく言葉である。右と左の脳の情報連絡・統合を行う「脳梁」が一番影響を受けるのは8歳から10歳、小学校で言うと4年生から5年生の時、また、心に影響をもたらす「前頭前野」が強い感受性を持つのは中学生の時期、この13歳から15歳の時期に心にダメージを受けやすい。この時期にこそ、アウトドア活動は本当に必要になってくるのではないだろうか。この時期に、アタッチメントの再生が可能になるのではないかと思われるからである。

ドン・ボスコの子どもたちは、ドン・ボスコから愛されていることが全てであった。そのために、ドン・ボスコはどんな犠牲もいとわずなんでもしたが、子どもたちもドン・ボスコに答えて、なんでもしようとしたのである。これがアタッチメントではないだろうか。ドン・ボスコは、わたしたちアシステンテが目指す教育者の理想なのである。

(シスターS.K.)